



~結ぶ絆から、広がるご縁へ~

如月の華



中央が武子夫人（資料提供・社会福祉法人 あそか会）

母の如
たのむ大地の叛逆に
なす術もなし 人の子あわれ（「無憂華」）

大正12年9月1日、大地震が関東を襲いました。
東京・横浜は火の海となり、築地本願寺も焼け落ち
てしまいます。逃げまどう武子さまも九死に一生を
得るのでした。本願寺が全国に発した救援の訓告を
受け、武子さまはエプロン姿で日比谷公園に設置さ
れた本願寺の救護班のテントで、寝る間も惜しんで
活動されます。そして、診療所にもかかれていません
い長屋の人々のために、無料の歳末巡回診療まで始
められるのです。しかし、その中で敗血症に倒れ、
沢山の人々の唱へるお念佛の中、42才という若さで
尊い御生涯を終えるのでした。

この胸に人の涙もうけよとや
われみづからが 苦しみの壺

九條武子さま

何となう 旅づかれせしわが額に
北の夜風の 身にしみわたる（「無憂華」）

23才の時、お裏方の実弟・九條家の良致男爵と
結婚。夫君のロンドン留学に合せ、歐州を訪れ、
ロンドンでは進んだ福祉施設なども視察されています。
しかし夫君はロンドンに滞在したまま帰ら
ず、姉とも慕う篠子さまは、仏教婦人会のこと、
女子大学の設立などの夢を託して、30才の若さで
この世を去ります。一人残された武子さまは、そ
のお仕事を一身に背負われ、南は鹿児島から、北
は樺太まで、待ち侘る全国の仏教婦人のもとへ、
信仰と励ましの旅を続けられたのでした。（この旅
は亡くなられる前年まで続けられます）



全国巡回中の一コマ（函館か）（高畠イク氏所蔵）

武子さまだと知ったのは高校生の頃です。「聖
夜」は数ある仏教讃歌の中で、ひときわ輝き
を放ちながら今も歌い継がれています。あの
細く艶やかなお姿のどこに、全国をご巡教し
てお念佛を広めてくださり、女子教育の啓発
に命を懸けられた情熱が秘められていたので
しょう。その顔まれな美しさと、歌を詠み、
書や絵画の筆を執られ、凡ゆる芸能にも卓越
前に何をあまゆる」全ての活動の根幹にお念
仏の香が熱く燃え、現在の仏教婦人会が設立
され、これまで人々の悪をしらず慈眼の
度の上演は嬉しいドキドキしています。どう
んな武子さまに舞台の上でお会いできるでし
ょうか。

外松多恵子（青少年カウンセラー）

武子さまは、本願寺第21代門主・明如上人の次
女として生まれ、父君の影響により幼少より歌道
にいそします。17才の時、父の逝去に会い、
長兄・光瑞さまが法灯を繼承されますが、お裏方
となられた篠子さまと力を合せ、仏教婦人会の近
代化に力を注がれるのでした。一方、歌人・佐佐
木信綱博士の主催する竹柏会に入門され、同門の
柳原白蓮、そして与謝野晶子とともに大正の三大
女流歌人と謳われます。（第一歌集「金鈴」、歌文
集「無憂華」、没後に編まれた「薰染」「白孔雀」
があります）

鈴鹿組前進座「如月の華」公演観劇

日時 2015年1月27日(火)

7時30分出発

集合 芸濃町総合文化センター

栄・中日劇場(観劇)

ANAクラウンプラザホテル

グランコート（昼食懇親）

費用 15,000円(バス・観劇・昼食含む)

募集 20名存仁寺割り当て

年番 お世話になります

上組 田中昭様 内田寿一様

中組 堀茂雄様 杉谷信郎様

南組 横山昇様 堤孝生様

新町組 駒田征男様 駒田雅朗様

下組 高橋忠久様 横山日出男様

岩原豊久野 横山登様 団地 横山克也様

先日二十cm超えの降雪も、このところの天候で、すっかり消えてしましたが、相変わらず北海道の寒さは、半端ではありません。ところで、北海道をテーマにした歌が沢山

有りますが、わたしがよく口ずさむ歌は、森進一のえりも岬が定番です。でも、「えりもの春は「あゝ何も無い春です」の歌詞が、私の気持ちの底に深く刺さり、今まで、どうしても襟裳岬を訪ねる事は有りませんでした。だって何もないんでしょうとの屁理屈からでした。ところが先日余りにも素晴らしい秋空に「今でしよう」の流行りの言葉に浮かれて、また妻の後押しの一言に妻友を誘い、えりも岬を訪ねるチャンスに恵まれました。

日高沿いの海岸の風景は、洋画にて観るヨーロッパの街並みが続く絶景に似て何度も、何度も感嘆の声を発する妻、妻友の声で心が癒されました。程無く、えりも岬の先端に着いた頃には、赤い夕陽が頬に映え、波間に落ちる寸前でした。「何も無い・なんて嘘だ」こんなに雄大な大自然の風景、綺麗な街並みが全て絵に為る処なんて、他には無いのです、と大きな感動に大満足で、帰りの遠い道程の運転も苦にならなく家路に着きました。チャンスが有ったなら、もう一度、時間を気にせずに訪ねたいと考えています。

北海道 大島義勝さんお手紙より

ドライブの想い出

(平成二十六年十月二十三日)

えりも岬

今朝は、この時期としては珍しく快晴ドライブ日和だ妻友をドライブに誘い、いざ（えりも）の景色が觀たく逸る気持ちに浮かれてか「今でしよう」を連発する



定年後に本格的に始めた狭い庭での花造りに、えさをもどめてひらいする野鳥に、最近は動物

好きのためか散歩の途中で出会う犬、猫に好かれで癒しを頂いています。飼い主に懐かない犬も、声を掛けると尾を振つて私に懐き、初対面の猫ちゃんが私の足回りに来てすりすりと体に触れたり、妙に動物に好かれます。そのことを妻に話し、最近は、ご近所の庭造りのボランティアにての作業中に、ふと、自分の夢である、お淨

土にて花を咲かせてみたいとの夢の実現に向かって、今ここに作業する自分がいるのではないだろうかと思えて、何も苦にならなく作業をしてい

る自分に気がつき、そのことを話したりします。また、此の年になると歳になると、昔を懐かしんだりして、その時代に戻りたいということをよく口にするが、足るを知るべきなのかと自問自答する昨今であります。今日も老いの縁りこと言を聞く妻がそこに居る昼下がりです。

一時の語らい（老いの繰り言）

師走の匂

決めかねしこと 初冬の風に 背を押され

白いご飯を口に運び、何気なく夫が話す

「花と語らい、庭野鳥、ご近所の犬、猫

に沢山の癒しを受ける自分は幸福だ

欲を言えば、夢を言えばだけね」

お淨土にて、お花を咲かせるのが夢だよ

テレビを観ながら、何気なく夫が話す

「眼を閉じたままの延命は、要らない」

今年は、周りの人を送る事が多い

夫の心に、姉のことを心配してか

仇さくら・・白骨と・・ご文書を詠う夫
お屋食を頂きながら、何気なく夫が話す

「先程ね、ご近所の庭造りの作業中にね
自分は今、お淨土に居て花を咲かせる為

お屋食を頂きながら、何気なく夫が話す
「先程ね、ご近所の庭造りの作業中にね
自分は今、お淨土に居て花を咲かせる為

夫の心に、小さな新しい光が差したのか

音楽を聴きながら、何気なく夫が話す

「本当に遡りたい夢は、何んだったのか

青春時代が懐かしい、今一度」と黙る
瞬く間に、過ぎた日々を懐かしむ

夫の夢、老いの繰り言を只聞く昼下がり



今年 年つ よ、嬉つ 、悲
つ、悔つ 、如来御手 中
より

決めかねしこと 初冬の風に 背を押され

朝寒の 手に陽光の 温みあり

石仏の 指かげろへる 紅葉散る

御法話に 身をのり出して 報恩講

水澄んで まことなるもの 映りたる

令わせやる 掌に秋冷の 痛きほど

青空を 透して見ゆる 松手入れ

落合登代子